

OTANING

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

中庭が完成しました!



わたしたちをエデュケート

学校長 飯山 等

今年の高校の学園祭、中高の体育大会、さらに中学の演劇コンクールは、さまざまな制限・制約の中での開催となりました。体育大会では、保護者のかたの参観を遠慮してもらい、

例年大いに盛り上がる種目の多くが割愛されました。高校の学園祭は大谷生だけで開催する一日となりました。私は心の片隅にある、残念だけれども今年は萎んだものになるだろうなあという思いを消すことはできませんでした。しかし、迎えたその日のパワーは私の予想を嬉しく裏切るものでした。皆の熱に息吹かれた一日となりました。それは、仲間と楽しむ、楽しみ合える仲間であることの素晴らしい証明として、目の行く至るところに感じられ、校歌にある《大谷われら》のすばらしい発現として真底うれしく思いました。校歌に、♪これぞ学び舎ああたのし、♪これぞ友どちああゆかし、♪これぞ古里ああうれし、♪これぞ安らぎああやさし、とあります。〈学び舎〉〈友どち〉〈古里〉〈安らぎ〉として存在し、《たのし》《ゆかし》《うれし》《やさし》と感受される。大谷は、その温かさを学校という存在の意義と使命の根幹としている。この疫禍はあらためて、そのことを真正面に据えて、大谷を、学校を考えよと私に迫ってきました。おおきな困難のなかにあるときこそ、存在していることの使命から身を離さずに、その真実を追求していく。そのあり方の大切さを思うことです。

私たち教職員も行事を計画・確定してゆく過程で、制限された形であってもそれぞれの催しを行おう、たのし!ゆかし!うれし!やさし!の発揚と共感の場が開かれることを大切にしようと考えて臨みました。このような状況の中での開催であるからこそ、大谷の《ほんとう》が顕れるという思いもありました。おだやかな陽光を受け、必要にして十分な養分を注がれる中で咲く花が、それゆえに往々にしてひ弱なものでしかなく、「疾風に勁草を知る」と古人が目を開いたごとく、いのちを根こぎせんばかりの風が吹き荒れる只中であって、はじめて育てられるいのちの勁さがある、そして、優しさ

があると信じて。高校学園祭のクロージングセレモニーで、生徒会長の宮原健瑠君が「これから2週間、誰もがコロナ感染症にかかることなく、学校が続けられたとき、この学園祭は成功だったと言えます」と挨拶を締めくくったとき、生徒の君たちがいちばん心をくわけていたのだと、胸に熱くこみ上げてくるものがありました。

中学の演劇の三日間、一日ごとに学年が進む4クラスを鑑賞しながら、若いいのちの一年という時間の濃密な成長に胸を打たれるとともに、教育を意味するエデュケーションの原義が、「人間を外へ、引っ張って、伸ばす」からきているということであらためて強く感じる三日間となりました。それは単に教員が生徒を引っ張って伸ばすという一方の作用ではなく、生徒が教員を外へ引っ張って伸ばす、さらに生徒同士が、教員相互が、互いに引っ張り出し合い、育ち合うという、双方向の運動であるということが、強く胸に迫って感じられました。今回十分にエデュケートされたか否かという評価的な視点ではなく、新たな未来を創生する根芽を、《わたし》にそして《わたしたち》に、生みそして育てる尊い機縁とするという創造的な志向を、しっかりと胸に刻みたいと思うことです。それは言うまでもなく、この伝統ある取り組みに向き合うわたしたちを、それぞれの得手不得手や、個々人の個性の問題として片付けて、わたしたちの力量はこれくらいと、蓋をして終わりとしないということです。

今年の大谷中高の生徒募集のパンフレットに、大谷という新しいフィールドで、あなた自身を新しく始めてほしいという気持ちを込めて、《私をキックオフ》という題でつたないメッセージを書きました。「新しいわたしたちを始める／私がわたしたちになる／わたしたちが私になる／新しい世界が開かれる／／忘れてしまいたいこと／消してしまいたいこと／胸に刻んで／私が私であることから退場しない／／遠く未来を想う／深く過去を憶う／ひとが人であること／それは想像するちから／／私は始まったばかり／／なにも終わっていない／真っ白な明日へ一歩／未来の私はここから始まる」というものです。これを私に書かせてくれたのは、ほかならない君たちであると、いまは確信を持って言えます。